

中津川（岩手県）

杜と水の都と謳われる私の故郷である盛岡には、北上川、雫石川、中津川の三つの川が流れている。今回私が取り上げるのは、その中の一つである**中津川**である。なぜなら、中津川は私が子供のころから慣れ親しんでおり、一番身近に感じるからである。春には河川敷に野花が咲き乱れ、散歩をする家族や幼稚園児が訪れ、夏には子供たちが裸になって水遊びに夢中になっている傍ら大人は鮎釣りを楽しんでいる。秋には鮭が産卵のため上流し、川の上にかかった橋からたくさんの人がそれを眺め、冬には飛来した白鳥たちの声が響いている。私も、小さい頃はよく川辺でおたまじゃくしの卵を見つけて喜んだり、妹と水をかけあって楽しんだりしたものである。このように四季折々に違った表情を見せてくれる中津川に、私はとても愛着を感じるのだ。



中津川をこのように身近に感じているのは私だけではないだろう。なぜかという、中津川は山のみもとの住宅地から盛岡の街なかにまでわたって流れており、盛岡に住む多くの人たちは散策の他にも日常的に通学や通学のルートとして中津川に親しんできたからだ。

中津川はその水質の良さで有名である。「野ザケ」と呼ばれる日本でも珍しい自然の鮭が市街地のほうまで遡上し産卵できるのは、この水質ゆえである。

小学生のころ、鮭の産卵の様子を川まで見に行ったことがあった。橋の上から川辺に降りてみると、なんとそこにひと粒だけ鮭の卵があったのである。最初は、何か別なものと見間違えているのかと思ったが、水に手を入れて触ってみると、確かに透明感と弾力を持った生きた卵だったのである。鮭が産卵することは知っていたが、実際に卵を見るとそれが本当であることを実感し、すごく感動したことも今でも覚えている。鮭の卵だけではない。

カエルやトンボなど、様々な生き物たちもこの川から生まれている。オタマジャクシやヤゴを見つけた時は気付かなかったけれど、鮭以外にもたくさんの生き物が中津川で産卵し、命をはぐくんでいるということに気が付き、中津川の偉大さを子供ながらも感じたものだ。

しかし、今でこそ清流を保っている中津川だが、一時期は鮭が遡上しない（正確には、遡上できない）時期があったのだという。太平洋戦争のころから戦後にかけて、北上川の上流にある松尾鉱山から大量の鉱毒水が流れ込んで北上川は死の川となり、サケも遡上できない川になっていた。その松尾鉱山が閉山し鉱毒水が処理されるようになってようやく

北上川は清流を取り戻し、サケが復活したのだった。中津川でサケの遡上が確認されたのは昭和49年、今から34年前のことだそうだ。

さらに、昔の中津川には清流の象徴ともいえるカジカがたくさん生息していた。1日に何10匹ものカジカを捕まえて遊んでいたという人の話を良く聞いたのだという。現在、50～60歳くらいより上の世代の方々の子ども時代の話なので、今から40年くらい前の話なのだが、本当に自然の豊かさが残っていたということになる。現在でもカジカの姿を目にすることはできるが、ほんのわずかな数にすぎないとのことである。

そして、とりわけ昔と大きく変わったことは、中津川の上流に網取ダムが建設されたこと、川沿いの都市化が進んだこと、農薬や洗剤が川に流れ込むようになったことである。直接的な因果関係は分からないが、生物にとって住みづらい環境になってきていることは事実である。私は、今でも中津川で遊ぶ子どもたちを目にするので、川で遊ぶ子どもは多いというふうに思っていたが、昔と比べるとやはり中津川で遊ぶ子どもの数も減っているようだ。川遊びを危険として禁止する親が増えたことも一因だろうが、川としての魅力が失われてきたこともその理由のひとつなのだろう。

NPO法人もりおか中津川の会のウェブサイトでは、中津川を「盛岡の命の川」と称し、次のように述べている。

春は色とりどりの花が、夏にはアユが、紅葉の秋にはサケが、そして冬には白鳥がかわるがわるに中津川に命を宿しており、また、中津川は市民みんなに愛され親しまれている川でもある。こども達は中津川での水遊びを通して成長し、人々は川の恵みに感謝し川とともに暮らしている。

もりおか中津川の会では、人間を含むすべての生物にとっての中津川の大切さを述べ、その中津川の保全に努めている。その活動は中津川周辺のハイキングの企画から、「減くるま」を掲げたワークショップの開催などと多岐にわたっており、気軽に参加することも可能だし、具体的な取り組みを市民中心となって行うことも可能なように配慮されている。特に、次世代を担う子供たちに焦点を当てた活動が多い。例えば小学校の野外学習では、もりおか中津川の会の会員が講師として授業に参加し、子供たちと一緒に中津川とそのまわりの自然について勉強したそうだ。他にも、中津川にかかる橋の清掃を中学生中心に実施したりしている。

私が通っていた小中学校の周りには川がないので、このような活動には参加できなかったが、参加できたら川ともっと違った関わり方や配慮ができたのではないかと思う。

これまで述べてきたように、昔から中津川はたくさんの市民から愛され、互いに守り守られるという関係を続けてきた。しかし、その関係がうわべだけの希薄なものになってきているのではないかと私は不安に思う。次のようなエピソードがある。夏に中学生を中心と

して中津川とその河川敷のごみ拾いをするという活動が定期的に行われているのだが、あまりのごみの少なさに中学生はがっかりするらしい。しかし、雪解けのあとその中からごみがたくさん出てくることが指摘されている。冬に積もった雪の中に隠すようにごみが散乱しているのだ。「見えないところではやらなくてもいい」という意識が潜在的にあるようで悲しくなった。中津川から恩恵を受けているという感謝の気持ちや川と共存するという謙虚さの薄さが、いくら隠しても隠しきれないごみに現れているように感じた。もちろん、市民が全員このようなするわけではない。川沿いに住む人がごみをみかけたら拾って片づけてくれているおかげで美しさが保たれているし、川沿いの道に進んで花を植えてくれる人もいる。しかし、そのたった少数の不心得者のために、多くの市民の努力が無駄になってしまうのである。だからこそ、市民は一丸となって中津川と向き合って、中津川と本当の意味において共生していく必要があると私は思う。

それゆえ、私も含めて中津川に関わるすべての人たちは、もっと中津川の大切さを理解すべきだと思う。世界や日本国内でも水不足に苦しんでいる地域がある中で、中津川を含む盛岡を流れる3つの川に生活を支えられているという事実を真摯に受け止め、もっと謙虚に中津川と関わっていくべきではないだろうか。いくら適切に中津川を管理していても、「管理してあげている」などという驕った態度では真に川と共生することにはならない。謙虚な姿勢をもって、中津川と関わっていくことが中津川を愛するということではないかと思うし、中津川がそのように人々から愛される川であることを私は願う。